地域親和型アートが注ぐ地域への活力

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕
「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

この1年ほど、「物語屋」さんこと、中川哲雄さんには、わが家を地域に開放しての「つたやさんち」を主として濃厚なお付き合いをいただいている。物語屋さんは小金井公園近くの住宅地に住んでおられるが、路地に面した自宅を開放して「Ｄｏｚｏ寄席」を定期的に開催しているのをはじめ、いろいろのところでジャンルを問わず話をすることを仕事にしている。中身は落語だったり地域の歴史だったり七十二候の話だったり臨機応変。落語も古典落語もあれば怪談話もあり、昨年12月に開かれた「年忘れ寄席」では名作「芝浜」を聞いて思わずホロリとさせられてしまった。

その物語屋さんが、絵本作家で切り絵アーティストのチャンキー松本さんとコラボして、長野県の最南端、阿南町の新野で「影絵とお話し『月祭りの夜』」を上演するというので新野まで足を運んでみた。新野で行われる雪祭りと夏の盆踊りは国の重要無形民俗文化財に指定されており、新野を南北に走る国道151号線は「祭り街道」と称されているように、長野県南部から愛知県にかけての地域は、祭りをはじめとする古い文化が濃厚に残ってもいる。柳田國男等民俗学者の多くは多様な民俗現象を比較検討することによって日本文化の起源に迫ろうとする帰納的方法を重視する。これに対して、マレビトやヨリシロというような古層に含まれる概念に日本文化の起源を求める演繹（えんえき）的な方法で独創的な民俗学を追求したのが折口信夫で、その彼が足しげく通ったのが新野である。

会場である瑞光院に集まったたくさんの人たち

ここで開催された「新野だら」という「お寺で楽しむ新野の物語」として「月祭りの夜」が行われたもので、これとあわせて長野市にある劇団ＴｅａＡｒｒｏｗによる演劇「おおばあちゃんの七人塚」も上演された。「月祭りの夜」は物語屋さんが新野に何回か足を運んで物語を着想したもので、地にすむ霊とでもいうか、それと現世にすむ人間との交歓をテーマにした作品である。これにチャンキー松本さんが影絵をつけたのであるが、絵の形や色合いの美しさはもちろんのこと、微妙な動きをも取り込んで、物語の持つ幻想性を見事に表現しており、この二人によるコラボだからこその素晴らしい上演であった。もう一つの演劇「おおばあちゃんの七人塚」も新野に残る民話をもとにしてＴｅａＡｒｒｏｗ自らが創作した作品で、大阪・夏の陣への出陣を命じられて新野から7人の侍が出かけたものの、大阪に到着した時には戦はもう終わっていたことをストーリーとする。

上演された二つは「地域親和型アート」をコンセプトに創作された作品であり、あくまで新野という地域にこだわり、そこに残る民話やお祭り等に着想を得て現代的な表現を試みたもので、まさに折口信夫の思想なり手法を現代に生かした作品であるといえる。今、アートの世界で、このように地域にこだわり、そしてその歴史や文化を再評価し、新たな作品を創造していく流れが生み出されつつあることに注目したい。東京一極集中が進む中で、地方活性化の必要性が叫ばれてはきたものの、ともすればコンパクトシティ化や東京の出先化が進行するにとどまっているのが実情である。これに対してあくまで地域から、地域の個性を生かしていくことをつうじて活性化を目指そうとする動きは貴重であり、流れが少しずつ大きくなっていくことを期待したい。